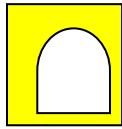


日吉台地下壕保存の会会報



第142号
日吉台地下壕保存の会

「知る」と「思い出す」こと

会長 阿久沢 武史

新型コロナウイルスの感染拡大により緊張と不安を感じる毎日をお過ごしのことと思います。会員の皆様がお元気に過ごされることを、何よりも強く願っております。

今年度の総会は、公開講演会とあわせ、例年通りの日程で6月13日(土)の予定でしたが、皆様にお集まりいただく形での開催は中止といたしました。会にとって前例のないことではありますが、今回は「会報」を通して総会の議案を提示いたします。まずはご確認いただき、ご意見やご質問等がございましたら、6月30日までに「会報」の末尾に記載の連絡先(亀岡・喜田)までお知らせください。それを受けて運営委員会で審議し、次号掲載の内容をもって議案成立といたします。施設の利用制限等によって会報の発送作業ができない場合もあります。郵送が困難な場合は、会の公式ホームページ(<http://hiyoshidai-chikagou.net>)に掲載いたしますので、ご確認ください。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて、5月25日をもって、全国の緊急事態宣言が解除され、少しずつ日常の生活を取り戻しつつあります。「コロナ後」という言葉さえ目にし、耳にするようにはなりましたが、依然として予断を許さない日々が続いています。それはこれからも続きます。自粛を余儀なくされた日々の中で、私はカミュの『ペスト』(新潮文庫)を読み、あらためて目の前の現実と文学との近似性に驚かされました。そこに描かれた世界は虚構(フィクション)ではなく、むしろ現実そのものとして、私たちの社会や私たち自身に迫ってきます。アルジェリアのある都市で原因不明の熱病が発生しました。ペストです。感染が急速に拡大し、街は封鎖され、人々は孤立していきます。そうした中で、この病気と必死に戦う若い医師リウーを主人公に、物語が進行していきます。やがて感染は終息に向かい、人々は開放されていきますが、リウーの親友タルーは激しい熱と咳に苦しみながら息を引き取ります。リウーはそれを見送るしかありません。

そしてタルーは今夜、二人の友情がほんとうに生きられる暇もなかったうちに、死んでしまったのだ。タルーは勝負に負けたのであった。——自分でいっていたように。しかし、彼、リウーは、いったい何を勝負にかちえたであろうか？ 彼がかちえたところ

は、ただ、ペストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そしてそれを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれを思い出すことになるということである。ペストと生とのかけにおいて、およそ人間がかちうることであったものは、それは知識と記憶であった。おそらくこれが、勝負に勝つとタルーが呼んでいたところのものなのだ！

【目次】

巻頭言【1-2p】「知る」と「思い出す」こと 会長 阿久沢武史
報告【2-5p】第32回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)

☆2019年度活動報告 ☆2019年度決算報告 ☆2020年度予算(案)

☆2020年度運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問(案)

☆2020年度活動方針(案)

報告【6-8p】ビルマ戦の記憶と継承

運営委員 遠藤美幸

報告【9p】大東亜会議の三人

運営委員 佐藤宗達

連載【10p】海外の戦跡めぐり(14) 盧溝橋事件

運営委員 佐藤宗達

連載【11p】日吉第一校舎ノート(18) 世界地図のカップ(2) 阿久沢武史

連載【12-14p】設備アレコレ(27)

軍令部第三部の海外ラジオ放送傍受とそのアンテナ 運営委員 山田 譲

報告【14-15p】桜花のレプリカ

運営委員 佐藤宗達

活動報告【15-16p】2020年1月～2020年5月

猛威をふるう伝染病に対して、人間は弱いものです。「死」という形で大切な人を失い、自分の命を失うこともあります。また時として心ない言葉や態度によって深く傷つくこともあります。しかし人間には「知る」「思い出す」という力があります。「知識と記憶」です。私たちは日常の生活の中で、往々にして大事なことをすぐに忘れます。しかし、今回の新型コロナウイルスをめぐる不安や緊張、あるいは悲しみの中で、私たちは多くの「忘れてはならない」ことを「知り」ました。「コロナ後」と呼ばれる生活は、まずそこから始まると思います。

「知識と記憶」(「知る」ことと、「思い出す」こと、「忘れない」こと)、これはこの会が長く取り組んでいる(そしてこれからも取り組み続けるに違いない)活動の根幹にあるものです。今年度も引き続き日吉台地下壕の保存を活動の中心に据えながら、さまざまな制約の中でも会員の皆様と心をひとつにして取り組んでいきたいと思っています。

報告

第32回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)

☆2019年度活動報告

- ◇会員数：個人340名 交換・寄贈団体：97団体
- ◇定期総会開催：第31回 2019年6月15日(土) 来往舎シンポジウムスペース
記念講演「日吉と鹿屋－沖縄戦航空特攻作戦に関わる二つの司令部－」
講師：安藤広道氏(慶應義塾大学文学部教授(考古学))
- ◇運営委員会開催：2019/4～2020/2 8回
- ◇会報発行：4回 138号(4/25)～141号(1/23)
- ◇地下壕見学会：2019/4～2020/2 37回 2,351人
- ◇ガイド学習会／拡大ガイド学習会：2019/7～2020/2 5回 菊名フラット、来往舎見学会ガイドの連絡・学習会。
- ◇公開講座：2019年4月6日(土)(来往舎二階中会議室)
「戦争体験者のお話」
話者：岩井忠正さん(人間魚雷「回天」、潜水服の特攻「伏龍」の元特攻隊員)
近藤恭造さん(元海軍電信兵)
- ◇バスツアー：2019年4/21(日)「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッチング」27名参加
- ◇第24回平和のための戦争展inよこはま：かながわ県民センターにて
講演会：2019年5/26(日)
展示会：2019年5/30(木)～6/2(日) 展示参加 日吉台地下壕紹介
- ◇港北図書館パネル展示会・ミニレクチャー・講演会：
展示会 2019年8月4日(日)～8月31日(土)
ミニレクチャー 8月18日(日)、8月25日(日)、
講演会 8月12日(日)『日吉キャンパスにある戦争遺跡』
- ◇第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会に参加
2018年8月24日(土)～26日(月)(参加者 350名)
主催：第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本 大会実行委員会、戦争遺跡保存全国ネットワーク
後援：熊本県、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本日日新聞社、RKK熊本放送、JCN熊本ケーブルネットワーク株式会社

8/24: 全体会

記念講演「熊本城と軍都熊本」大阪大学名誉教授 猪飼隆明氏
 基調報告 出原恵三氏(戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表)
 地域発表 くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク他

8/25: 分科会 第一分科会「保存活動の現状と課題」
 第二分科会「調査の方法と整備技術」
 第三分科会「平和博物館と次世代への継承」

8/26: フィールドワーク

A コース:「熊本市内の戦跡をめぐる」熊本空襲慰霊碑、三菱重工熊本航空製作所、歩兵十三聯隊酒保・食堂跡、義烈空挺隊慰霊碑、陸上自衛隊戦史資料室など
 B コース:「菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」旧陸軍傷病軍人療養所再春荘内の空襲慰霊碑「留魂碑」、旧逓信省熊本航空機乗員養成奉安殿など

◇第27回横浜・川崎平和のための戦争展:2019年11/29(金)~30(土)

テーマ:＜少年・少女と戦争＞～戦争遺跡から見えてくること～

会場:慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎イベントテラス・シンポジウムスペース

パネル展示会:日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、川崎中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

2019年度 決算報告

(単位 円)

若者の発表:日吉台中学校演劇部による朗読劇・慶應義塾高校生による研究報告
講演会:「ある海軍特別年少兵の生き抜く力『雪風』に乗った少年』を語る」講師 『雪風』に乗った少年』編者 小川万海子さん
各団体からの活動報告

◇11/11(月)横浜市教育委員会文化財課・環境創造局緑地保全課と面会(横浜市役所)

◇ガイド養成講座:

第13期 2019/1~5 修了者8名、
 第14期 2020/1~5 講座未修了

※2019年4月6日(第13期3回目)には、「戦争体験者のお話」というテーマで、元慶應学徒兵・岩井忠正さんと元海軍電信兵・近藤恭造さんより、お話ししていただきました。

費 目	2019年度予算	2019年度決算	備 考
【収入の部】			
会費	300,000	282,696	195名
見学会資料代	500,000	519,840	
図書等頒布	100,000	5,900	
寄付金等	0	79,555	
ガイド講座受講料	0	6,000	
繰越金	345,306	345,306	
計	1,245,306	1,239,297	
【支出の部】			
運営費	160,000	125,505	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	70,686	事務用品費等
印刷費	100,000	113,505	会報・資料等
通信費	300,000	222,636	会報送料等
図書資料費	100,000	3,400	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	92,990	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	61,700	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	85,306	0	
小計		690,422	
差引残高		548,875	次年度繰越金
計	1,245,306	1,239,297	

以上の通り報告します。

2020年5月29日

日吉台地下壕保存の会

会 計 亀岡 敦子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 園子



☆2020年度 予算(案) (単位 円)

費 目	2020年度予算	備 考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	548,875	
合計	1,448,875	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	288,875	
合計	1,448,875	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2020年6月12日

日吉台地下壕保存の会
運営委員会

☆2020年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問(案)

会 長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子

運営委員 石橋 星志

岡上 そう

小山 信雄

谷藤 基夫

宮本 順子

山田 淑子

会計監査 熊谷 紀子

顧 問 鮫島 重俊

喜田 美登里

上野 美代子

岡本 秀樹

櫻井 準也

中沢 正子

茂呂 秀宏

渡辺 清

山口 園子

羽田 功

遠藤 美幸

岡本 雅之

佐藤 宗達

福岡 誠

山田 讓

☆2020年度 活動方針(案)

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、今年度は会の活動が大きく制限されることが予想されます。地下壕見学会の実施については、慶應義塾と調整しながら、会としても慎重に検討することが求められます。地域の小中学校などの学校単位の見学会も、そのほとんどが自粛されるでしょう。会が主催する講演会や学習会、聞き取り調査、パネル展示会等も、中止もしくは自粛という選択になると思います。このような中で、今年度の活動方針を立てることはきわめて困難ではありますが、これまでの会の活動の歴史を踏まえ、以下のとおり昨年度と同じ方針を提案いたします。ただし、実施に関しては安全を第一とし、ひとつひとつ慎重に判断してまいります。

昨年度の活動の成果として『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』(平和文化)の第4版第1刷の発行(2019年9月2日)があげられます。見学会用の冊子『戦争遺跡を歩く日吉』は、一昨年に第9版を改定発行し、ともに版を重ねてきました。今年度は、これまでの聞き取り記録を整理した「日吉台地下壕保存の会資料集2」の完成をめざし、準備を進めていきます。さまざまな制約の中でも、会員の皆様と勉強を重ね、地下壕の保存に向けた活動を継続していきます。

以上を踏まえ、2020年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 川崎・横浜平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。



コサギの路上歩行



シジュウカラのヒナ

報告

ビルマ戦の記憶と継承—元日本兵の慰霊を続ける村—

運営委員 遠藤美幸

◇戦争の記憶の風化

“地獄のビルマ”から生還した元日本兵士らは、戦後、戦友会を作り、ビルマ（現ミャンマー）への遺骨収集や慰霊活動に熱心だった。戦友会とは、軍隊において戦場体験や部隊への所属体験を共有した集まりである。1965年から69年は設立の全盛期だ。ビルマ戦の戦友会もこの時期に全国（関東・関西・四国・九州）に設立。彼らは、戦後30年から50年を節目に慰霊碑や墓碑を次々に建立した。

戦後74年ともなれば戦争の記憶の風化もやむを得ない。ビルマ戦場跡の各所に建てられた旧日本軍の慰霊碑や墓碑は現地社会に根ざすことなく次第に忘却され、慰霊巡拝に訪れる人もそれを管理する人も減少し、慰霊碑や墓碑の経年劣化は進んでいる。そのような現状の中、元日本兵の慰霊を続けている村がある。

◇戦場になったウェトレット村

ビルマ中部の都市メイクテラから南に約35キロのウェトレット村は、旧マンダレー街道に面した人口150人ほどの小さな農村だ（メイクテラはビルマ語ではメッティラ、またウェトレット村はウェッレット村だが、当時の元日本兵の呼称を使用）。米や綿や豆類を栽培している。電気も3年前に通ったばかり。井戸で水を汲む生活は昔からだ。のどかな農村の風景だが、74年前、ここは戦場になった。

1945年のビルマ戦は総じて敗走戦である。英印軍は、当時最大級の米製のM4戦車を先頭に日本軍の後方兵站基地のメイクテラにとどめを刺すため前進中であつた。

同年3月8日、日本軍第49師団（狼兵団）第168連隊の第1大隊は、大砲2門と兵隊約300名（森本隊歩兵200名と中村隊砲兵100名）をもって、英印軍約2千名と戦車30両をウェトレット村付近で迎え撃った。圧倒的な兵力と物量の差はいかんせん…。敵戦車に爆弾を抱いて突っ込む肉弾戦が随所で行われ、マンダレー街道は肉片と血の海だったと聞く。その中に中村清一さん（当時25歳）もいた。中村さんはウェトレットの戦いを指揮する山砲第3中隊の中隊長だった。



中村清一さん

(2016年12月撮影 当時96歳)

戦闘の朝、見張りの神岡小隊長が中村隊長の所に飛んで来て、「隊長！戦車が来ました」と叫んだ。中村隊長は早速山砲1門を指揮する芳賀小隊長と打ち合わせて敵の戦車を撃ち取る最新兵器の「タ弾（対戦車用炸裂弾）」を用意した。英印軍は戦車を先頭に進軍し、森に隠れて待機している中村隊長の前の道路をゆっくりと警戒しながら通過した。中村隊長は部下に一番先頭の戦車の攻撃を指示し、自ら目前で停止した9両目のM4のキャタピラに「タ弾」を撃ち込んで頓挫させた。「武器兵力劣勢のなかM4に唯一対抗できたのは、『タ弾』という新兵器があったからだ」と中村さんは語る。「タ弾」は、火力が強く、分厚い鉄板の戦車に穴をあけることができた。1944年にドイツから技術を学び、小倉（北九州市）の兵器工場で製造された。日本では、ビルマ戦線投入は45年初頭からで、44年5月に編成された第49師団（狼兵団）しか装備できなかった。中村隊長は「タ弾を持っていたことが心の支えになった。鉄砲の弾は問題にならなかった」と語った。

3月8日の午前11時から午後5時まで日英軍の激戦は続いた。村は全焼。英印軍は予想だにしない大損害を受け、日

暮れ前に退却した。日本軍の損害も大きかった。山砲の中村中隊の小隊長以下 19 名と歩兵の森本中隊の将兵 31 名が戦死した。

◇ウエモンが見た戦場のリアル

1975 年、中村清一さん(当時 55 歳)は、日本政府派遣第一次遺骨収集団第 9 班の班長として戦後はじめてビルマを訪ねた。中村さんは、戦場となったウェトレット村に向かいながら、村人に石を投げられる覚悟をしたという。ところが思いもよらぬ展開が待っていた。

村長のウエモン(当時 43 歳)が中村さんに近づいてきて、「当時 13 歳だった私は、木の上から戦闘を見ていた」と言った。中村さんも最初は、物乞い目的でデタラメを言っているのだと疑った。

ところがウエモンは中村さんより当時の戦闘の様子をよく知っていた。英印軍の M4 戦車 1 台が燃え、英印軍はその戦車を残して引き揚げた。もう 1 台、先頭の戦車が燃えたことも知っていた(火炎放射器で炎上)。英印軍の指揮官が「今日は大変なことになった」と言って戦死者をトラックに乗せて帰って行った(これは中村さんも知らない)。日本軍は戦死者をその場に穴を掘って埋めた。ウエモンは「村の畑を走っていたのはあなただ」と言った。

中村さんは驚いた。自分がどちらに向かって走っていたかを問うた。間違いない。ウエモンは「日本の兵隊は勇敢だった。この事をぜひ後世に伝え見習いたい。村に日本軍戦死者のための慰霊碑を建立したい」と話を結んだという。中村さんは戦争の話をすると必ず「村人に多大な迷惑をかけたのに日本兵の慰霊をしてくれて感謝する。戦争は悪いことだけど、東南アジアの人々との交流と、国のために命をかけた日本の若者を忘れないでほしい」と語った。

◇慰霊に人生を捧げた中村中隊長

中村さんは銀行を定年退職した後、本格的にビルマでの遺骨収集と慰霊に専念する。

「兵隊は自分の指揮で死んだ。だから死んだ兵隊の顔は忘れられない。家族や自分の幸せよりも、指揮官として 50 名の部下の慰霊のために捧げた人生だ」と話す中村さんは、戦没者の慰霊活動に私財を投じた。

1998 年、ウェトレット村に井戸を寄贈した。「中村の井戸」と呼ばれて村人の生活を支えた。2000 年 1 月 1 日、ウエモンが望んだ慰霊塔とパゴダを建立した。ここにウェトレットの戦いで戦没した全ての日本兵の氏名が刻まれている。現地の大理石で作られ、碑文は日本語とビルマ語の併記だ。2007 年には、寺院を寄贈した。「中村 temple」と親しまれ、公民館のように村人が集う場所になっている。この年を最後に 80 代半ばの中村さんはウェトレット村に行けなくなった。十数年前から慰霊巡拝者がほとんど訪れていない。それでも、戦闘のあった 3 月 8 日に、ウエモンとその家族が村人に参列を呼びかけて、毎年ウェトレット村では、4、5 名の僧侶を招いて村人総出で慰霊祭を行っている。

◇慰霊祭に参加して思うこと

2016 年と翌年の 3 月 8 日に、私は唯一の日本人としてウェトレット村の慰霊祭に参列した。

午前中に 30 度を超す高温になるので、戸外の慰霊祭は早朝の 7 時 30 分開始だ。色彩豊かなロンジーで身を包んだ老若男女が慰霊碑とパゴダの前の地べたに坐る。4、5 名の僧侶が慰霊碑とパゴダを背に村人に向かって椅子に座る。とくに乾期のメークテーラ戦の最大の敵は水不足だと聞いていた。言付かった日本の菓子、酒、水をたくさん供えた。



2017 年 3 月のウェトレット村の慰霊祭(著者参加)

いよいよ始まった。僧侶による読経の最中、銀の器に水滴を垂らして“灌水(かんすい)供養”をする。ウエモンと中村さんの役目だが、この時は恐れ多くも中村さんの代わりを私が務めた。功德を回向(えこう)するため、1滴ずつ水差しの水滴を銀の器に垂らすのだが、見るより、やると難しい。せっかちなせいか器がすぐに水でいっぱいになってしまった。読経が終わると参列者が一人ずつ慰霊碑前の台に花を供えた。

その後、中村 temple に場所を移す。僧侶の読経と講話が終わると、参加者でおもてなし料理(乾燥魚の煮物、スープ、マンゴーサラダなど)を会食する。子どもたちも一緒だ。近隣の村人も合わせて60名ほどが賑やかに集った(2017年3月8日)。

日本人の私に僧侶から特別な講話があった。僧侶はビルマでは大変尊敬されているので有難いことであった。私は僧侶になぜ旧日本軍の慰霊祭をするのかと不躰にも質問をすると、次のように諭された。

「民族は関係なく、ビルマ戦で亡くなったすべての戦没者のための慰霊祭です。日本人のあなたが慰霊祭に参列することは良いこと。人間は必ず死にます。生きている間にできるだけ良いことをしなさい。功德を積むのです。それが仏様の教えです」

僧侶の言葉が心に響いた。思わず涙がこぼれた。

◇ビルマは「親日的」なのか？

ウェトレット村の旧日本軍戦没者慰霊祭の事例は、元将校の中村清一さんと元村長のウエモンの長年の人的絆と信頼が現地主導の慰霊祭の継続に繋がっている。これを日本側が“日緬友好の証”と過大に評価し、「ビルマ戦は植民地解放戦争であり、ビルマの独立に日本が寄与した」と主唱する人たちの都合の良い証拠とされることを懸念する。事実在即したビルマ戦の記憶の継承のためにも、戦場の内実を日英緬から多面的に検証されなければならない。

中でも日本占領期のビルマのナショナリズム運動の特質を理解することなく「ビルマ人は親日的だ」と安易な“親日論”がビルマ戦の記憶として次世代に継承されてよいだろうか。

英軍側の興味深い史料がある。英領ビルマのドーマン・スミス総督(在任1941-46年)が避難先のシムラー(インド北部の都市)でまとめた英国のビルマ作戦(日本軍に敗北した初期のビルマ防衛作戦)に関する1943年11月10日付の報告書だ。これには「英軍撤退時、ビルマ人は西欧人に対して親切な行動をした。彼らは『親日』ではないと解釈できるが、一方で、日本軍敗退時にも同じような親切を日本兵らにも行った」と記載されている。

つまり、ビルマ人は“親日的”でもあり“親英的”でもある。僧侶の言葉を借りるなら、民族に関係なくお釈迦様の教えに忠実に困った人を助けているのだ。私がウエモンに戦時中の日英軍の加害行為の実態を聞くと、「空から爆弾を落とされたら日本軍でも英軍でも嫌に決まっている。嫌な記憶は我慢して乗り越えた」と答えた。どこの国だろうと戦争はご免こうむりたいのは当然である。ビルマ人は民族自決、独立を成し遂げるためには親日的にも親英的にもなり得るのだ。ビルマ近現代史の専門家の根本敬教授はビルマ人のアンビバレントな立場を「抵抗と協力の狭間」と呼ぶ。協力姿勢を見せて相手の信頼を得ながら自己主張と抵抗の基盤を徐々に拡大するやり方だ。これも生き抜く術なのだろう。

元日本兵らが語る、ビルマ人によくしてもらった、彼らは「親日的だ」という記憶は、中村さんの体験からも事実なのだと思う。でも受け継ぐ私たちは、それを鵜呑みにして終わらせてはいけない。そこでどんな戦いがあったのか、現地の人土地や財産や命まで奪う戦場の実像を知った上で、戦争の記憶を次世代に受け継がなければならない。それこそが、元日本兵の慰霊祭を続けているウェトレット村の人びとに対する真実の友好の証といえるのではないか。

この原稿を書いている最中、新元号の令和を迎えたばかりの5月9日に、中村清一さんは戦友の待つビルマの地に旅立たれました。享年99歳。ご冥福を心よりお祈り致します。

※本稿は、『きらめきプラス』2019.6月号(76号)最後の証言「厭戦」(歴史研究家 遠藤美幸)に掲載されたものです。

報告

「大東亜会議」の三要人

運営委員 佐藤 宗達

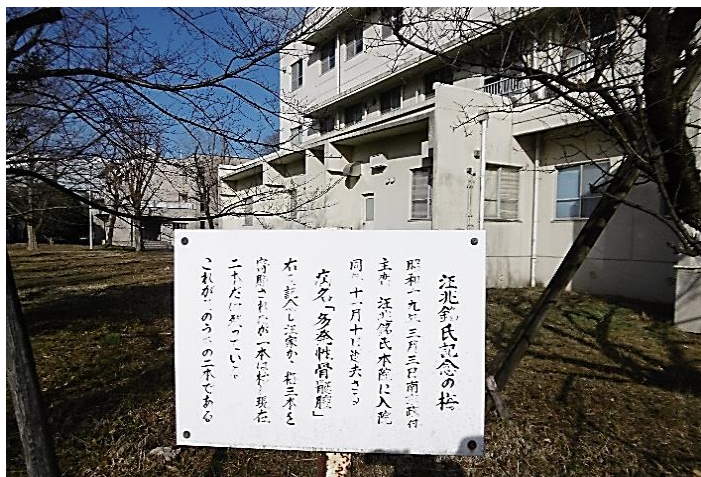
1943年11月東京で当時の日本の同盟国や、「旧宗主国を追放したことにより独立」したアジア諸国の国政最高責任者を招集して「大東亜会議」が開催され、欧米の白人植民地政策からの脱却を謳い有色人種のみが一堂に会した会議であった。

参加国・代表者は「中華民国・南京政府」(汪兆銘行政院長)、「満州国」(張景恵國務総理大臣)「フィリピン共和国」(ホセ・ラウレル大統領)「ビルマ国」(バー・モウ内閣総理大臣)「タイ王国」(ワンワイタヤーコーン親王)及びインドの独立を目指し日本に協力を求めて活動中の「自由インド仮政府首班」のチャンドラ・ボースも参加した。この中の3人は日本と深い縁があります。

- ・ **汪兆銘(1883-1944)** 1944年4月来日、名古屋帝国大学付属病院にて手術を受け療養したが同年11月に死亡した。その後遺族より治療に対する感謝として梅の木3本が贈られ、1本は枯れたものの2本は大幸キャンパス内(医学部保健学科)に現存しております。
- ・ **ホセ・ラウレル(1891-1959)** 1943年10月日本軍の後押しで大統領に就任、「大東亜会議」に出席した。1945年3月には台湾経由日本に亡命、奈良ホテルで生活した。戦後は戦犯としてフィリピンに呼び戻され、再度政界に復帰した。ゆかりの奈良ホテルのロビーには地元有志が造った記念の胸像が片隅にヒっそリと置いてあります。
- ・ **チャンドラ・ボース(1897-1945)** インド全土のイギリスからの完全独立を目指し活動していたが、終戦後は台湾・台北から大連に移動せんとしたものの、日本軍手配の飛行機が不具合で墜落・炎上、火傷を負い死亡した。遺骨は日本でインド独立連盟東京代表ラマ・ムルティに引き渡され、東京都杉並区の日蓮宗蓮光寺の望月教榮住職が葬儀を引き受けた。遺骨の一部は蓮光寺に保管され毎年夏に法要が営まれている。



ホセ・ラウエル胸像
(奈良ホテルロビー)



汪兆銘の梅(名古屋大学・大幸キャンパス)



チャンドラ・ボース胸像
(杉並区・蓮光寺境内)

報告

海外の戦跡めぐり(14) 北支事変—盧溝橋事件・中国

運営委員 佐藤宗達

1937年7月7日の夜、北京(当時北平)の郊外・盧溝橋付近で夜間演習をしていた日本軍に銃弾が撃ち込まれた。それが中国側の攻撃か、日本軍による謀略なのかはいまだにわからない。当時日本軍と中国軍との小競り合いは頻繁にあり、本件も現地で停戦協議が成立した。しかし陸軍強硬派の一撃論(一撃を加えれば中国はすぐ屈服する)を入れ、政府は5個師団の派兵を決定し、やがて日中戦争へと発展する。現地の責任者は支那駐屯軍歩兵第一連隊長・牟田口廉也大佐で、のちのインパール作戦の司令官である。

「なぜ北京に日本軍が?」、これは1900年の北清事変(義和団事件)に遡る。日本は広島第五師団を主力とする派遣軍を編成したが、他に1個中隊規模の臨時鉄道隊も派遣された。義和団は西洋文明の象徴である鉄道を忌み嫌い徹底的に破壊した。出兵した各国は鉄道の修復を通じて権益の確保・拡大を狙った。ロシア・イギリスなどの列強とともに日本の臨時鉄道隊も修復工事に従事したが、主要部分は列強国が押さえており結局、北京城外の豊台の4km南東の黄村から楊村までの約80kmの復旧作業をした。日本は議定書により列強と共に駐屯権を認めさせ北京市内の他に豊台にも駐屯した。当時豊台の西側:盧溝橋の左岸の宛平県城には国民革命軍第29軍第37師団が駐屯しており、7月7日の夜間演習は豊台と盧溝橋のほぼ中間の一文字山付近での衝突であった。

盧溝橋は北京の郊外南西20kmの豊台を流れる永定河に架かる石橋で金代の明昌3年(1192年)に完成し、その後度々修復が施されている。マルコポーロは東方見聞録で「まったく世界中どこを捜しても匹敵するものはないほどのみごとさ」と絶賛したことで知られており、西欧ではマルコポーロの橋と呼ばれている。

盧溝橋への交通の便が悪く、車で半日の行程だったが、近くまで地下鉄が伸びたので行きやすくなりました。それでも地下鉄で約1時間と徒歩30分はかかります。

橋は路面が舗装されて自動車も通行していましたが老朽化が進み、1980年代には史跡保護を目的に大規模な修復工事が施され、自動車の通行は禁止されました。路面は舗装されたままですが、橋の中央部分には往年の石畳が一部復元されており、欄干には獅子の彫像が並び往年の面影を今に伝えております。



欄干の獅子の彫像



盧溝橋 (Marco Polo Bridge) 往年の石畳



橋の袂の「盧溝曉月」の碑
乾隆帝(18世紀 清第6代皇帝)
が月見をしたという故事による

連載

日吉第一校舎ノート(18) 世界地図のカップ(その2)

会長 阿久沢 武史

1920年代から30年代前半は、世界が「網の目」のようにつながった時代であった。その背景には第一次世界大戦以後の国際協調と軍縮の動きがあった。街にはモダニズム文化が花開き、世界の大都市で同時進行的に最新のモードが伝播していく。アール・デコはその代表的な例である。しかし一方で、昭和6年(1931)には満州事変が起こり、日本は翌年満州国建国を宣言、これをきっかけに昭和8年(1933)3月に国際連盟を脱退する。以後、国際社会の中で孤立化への道を進むことになる。

「理想的新学園」の建設を目指し、「学びの空間のロマン」を願った設計者の思いは、現実にはこのような時代のうねりの中にあった。だが、第一校舎が竣工した昭和9年(1934)は、まだ決して軍国主義一色の時代ではなかった。それはちょうどコペル君が銀座のデパートの屋上から眺めた風景のように、20年代から続く豊かなモダニズム文化が大都会の空の下には広がっていた。それを踏まえて考えるなら、世界地図のカップは、やはり国際主義的な視点からその意味を捉えるべきであろう。日吉キャンパスは、駅から一直線に伸びる銀杏並木を中心軸にして、櫛並木が直角に交差する。駅から放射線状に伸びる日吉の街路を含め、ここは閉じられた空間ではなく世界に向けて開かれた空間と言う方がふさわしい。第一校舎は当時最先端の技術であった鉄筋コンクリート打放し仕上げの施工が採用され、世界的に流行していたアール・デコのデザインが随所に取り入れられている。古代ギリシアに由来する古典主義と現代的なモードとの融合、いわば通時性と共時性という二つのベクトルが出会う交点とでも言うべき建築物であり、やはりそこには偏狭なナショナリズムではなく、インターナショナリズムこそがふさわしいと思うのである。とすれば、カップに描かれた世界地図には、国際的な視野を持ち世界に向けて雄飛してほしいという若き塾生に向けての思いがシンボリックに表現されているのではないか。それは正面玄関ホールに描かれた翼を広げた鷺の図柄と共鳴する。「知性」の象徴としての鷺、天空高く飛び、太陽を直視して真理を見極める鷺のような鋭い目をもって世界に羽ばたいてほしいという願いである。もちろんそれは「ペン」の持つ意味とも重なることになる。網戸武夫によれば、日吉キャンパスの全体計画の構想には、中條精一郎の「壮大なパルチー(根本方策)」が大きく投影していた。

中條精一郎は、この丘の上に50年あるいは100年先の未来を夢みた。中心軸上の中央道路左右に銀杏の並木を配し、これが育っていく未来へ学生達の成長を併せ望んだ。畳二枚ぐらいの全体計画の鳥瞰図は、この中條の願望をかけて描かれ、大巻物軸に仕立てられ、その大画面は完成した。(網戸武夫『建築・経験とモラル』住まいの図書館出版局) 鷺が本来持つ「飛翔」と「知性」の神話的意味は、世界地図のカップと相まって新しいキャンパスの新しい校舎にふさわしい教育的理想へと昇華していったということになる。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号(2015年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(二)クラシックとモダン」の再録となります。



日吉台慶應義塾全配置計画図、福澤研究センター所蔵

連載

地下壕設備アレコレ【27】

軍令部第3部の海外ラジオ放送傍受とそのアンテナ

運営委員 山田 譲

軍令部第3部では情報源の一つとして海外の短波ラジオ放送を聞いていたと、部員だった実松譲・元大佐が『日米情報戦記』に書いています。そのための「K班」は第3部長直属で、「2年現役・予備士官」(大学出身主計科士官と徴兵猶予停止の学徒出陣者)が14名。その他に嘱託と理事生が多数いて、「敵側のラジオ傍受作業」は「主として軍令部内で行ない、『K班』の一部は実施部隊に派遣された。」と書かれています。この「実施部隊」というのは、何をさすのかわかりません。日吉の地下壕で勤務していた東京通信隊、あるいは各鎮守府などなのかもしれません。

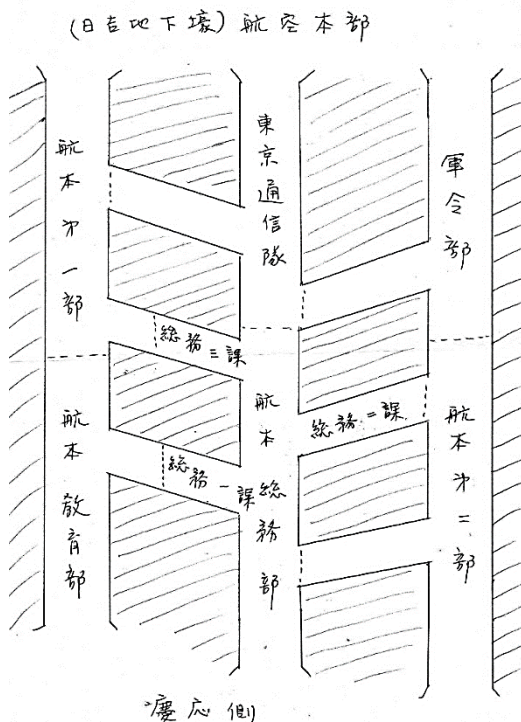
日吉の航空本部地下壕に勤務していた石井和義さんが描いたスケッチには、「日吉(東京通信隊)」「米軍のジャズを大きな音で流していた」という書き込みがあります。このスケッチには木造平屋の建物と、「電信柱をつないだ」アンテナ柱とアンテナ線が描かれています。場所は「義塾構内運動場」「この先……地下壕の入口あり」と書かれているので、マムシ谷東側にあった東京通信隊地下壕の地上の位置(現在の自動車部練習場あたり)ではないかと思われます。

「米軍のジャズ」と書かれています。実際はアメリカの一般向け短波ラジオ放送(ホルル放送やサンフランシスコ放送など)ではないかと思います。普通のラジオニュースで、戦況や軍需生産状況が放送されていました。これについて実松氏は、これが「かなり有用な多くの情報を提供」しているので、「この放送を傍受して利用した。」(『日米情報戦記』)と書いています。アメリカのラジオ放送は、日本のNHKラジオのデタラメな大本営発表とは大違いだったようです。

軍令部第3部で実松大佐の下で勤務していた増井潔・元大尉(慶應出身予備士官)は、「日吉に毎朝出勤すると、デスクの上に傍受した情報のデータが5~6cm以上の厚さに積んであった。」(慶應生協ニュース第43号)と話しています。これは英文で、「重要なものは……日本語に訳した。」ということなので暗号文ではありません。ラジオの英語放送を毎日、大量に書きとっていたのでしょう。

しかし、軍令部第3部がいた第一校舎で短波の海外放送を聞いていたとすると、アンテナはどうなっていたのでしょうか。これについては、1944年4月に慶應大学文学部予科に入学し、戦後は慶應職員を勤められた柳屋良博氏が生協ニュース第70号に手記を書いています。「予科校舎の正面玄関右側(南側)は大日本帝国海軍軍令部の専有するところであり、生徒は左側部分を使用した。」「屋上に無線アンテナが林立し、……校舎はまるででっかい一隻の軍艦のように思われた。」というのです。この無線アンテナは、間違いなく米軍および連合国の通信・放送傍受のためのものです。

しかし、1945年春に日吉にきた航空本部の理事生たちが、第一校舎の屋上でとった集合写真にはアンテナは写っていません。アンテナが写らないようにしたのでしょうか。これは推測ですが、1945年春には東京通信隊が日吉の地下壕にきたので、受信設備・アンテナは通信隊に移してしまったのではないのでしょうか。それが石井和義さんのスケッチの、建物とアンテナなのではないかと思うわけです。



日吉地下壕内の軍令部第3部と
東京通信隊の配置

(航空本部元理事生秋元智恵子さん作図)

軍令部第3部の米国情報担当だった元理事生・津田つる子さんの話では、「アメリカの短波放送を2世の人たちが傍受し、その内容を語学が堪能な方たち（ハーバード大学から帰国された鶴見俊輔さんなど）が翻訳し、津田さんたちが邦文タイプで文書に仕上げていった。」「最初は第一校舎の2階で、途中からチャペルに移って、仕事をして」（会報第60号）いたそうです。軍令部第3部の別の資料の名簿には、「ハワイ二世K班」と記された3名の男女の氏名が書かれていました。（付記・1 参照）

連合艦隊司令部や蟹ヶ谷通信隊、大和田通信所でも海外ラジオを傍受

また、連合艦隊司令部にも特信班（敵信班）がいました。1945年6月に寄宿舍作戦室前で写した集合写真には、慶應出身の李家弘道・元大尉をはじめ8人の特信班将校が写っています。この人たちは寄宿舍で仕事をしていました。李家氏はこの時のことを、「暗号電報はほとんど解読出来ないが、普通の英文電報や英文放送は、下士官・兵が受信機で傍受しながら英文タイプし（暗号電報も同じ）、これをわれわれが読む。」（『日吉寮開設50周年記念誌』）と回想しています。

地下壕には通信兵がいて日本海軍内部の通信を受信していましたが、この地下で電信兵の高田賢司さんもアメリカの放送を聞いていたそうです。しかし、これは任務ではなく休憩時間にこっそりと、ハワイの放送などでジャズやハワイアンを聴いて「病みつきになった」と話していました。（会報第139号聞き取り記事参照）

また連合艦隊司令部情報参謀の中島親孝・元中佐は、「慶應チャペルにラジオをおいて、英語のできる士官が外国の放送を受信し、情報を得ていた。」（生協ニュース第45号）と話しています。ただチャペルに短波ラジオが本当にあったかどうかは、私はどうかな？と思っています。ラジオがあるなら、すぐそばにアンテナも必要です。アンテナはかなり目立つものですが、そういう話は今のところ伝わっていません。中島親孝氏は情報担当なので軍令部第3部の実松譲大佐とよく会っていたと書いていますが、第3部K班は自分の部下ではありません。1988年の聞き取りなので43年前ですから、記憶違いがあるかもしれませんね。

蟹ヶ谷の東京通信隊ではアメリカ兵の「捕虜に連合軍の電波の受信をやらせていた。」「捕虜がとった受信は、英字新聞のように関係者に発表されていた。……生放送で受信した戦況の様子が入っていた。」（蟹ヶ谷通信隊元隊員T・H氏の話 生協ニュース第63号）とのことでした。

海軍大和田通信所（埼玉県新座市、敵通信傍受専門）でも、こういう米英のラジオ放送を傍受していました。そこで勤務していた野原一夫氏は、サンフランシスコ放送やニューデリー放送を聞く班（V班＝ヴォイス班、音声通話・放送を聞く班）があったと『回想 学徒出陣』に書いています。

《付記・1》「軍令部第三部直属終戦時名簿」

軍令部第3部所属で日吉の地下壕に勤務した平野保さんから、1998年に手紙と資料をいただいていた。寺田貞治さんの資料の中にあつたものです。この中に「軍令部第三部直属終戦時名簿（S20・8・15）」がありました。ここに書かれている「第三部直属」というのは、第三部・部長に直属し第5～8課に属さない部員ということです。これを『戦史叢書』付録の「軍令部事務分担一覧表」と対照してみると、この名簿は第3部長直属者全員ではなく直属乙部員矢島少佐の部下の名簿でした。

名簿は、中瀬浜中將【第3部長、少将】
塚田収大佐【直属甲部員】 矢嶋源太郎少佐



海外ラジオ放送の翻訳とタイプライター清書
をしていたチャペル

【矢島 直属乙部員】——【 】内は『戦史叢書』の「一覧表」に書かれていたことで、こちらの方が正確——から始まり 26 人の氏名、住所が書かれています。(ちなみに矢島源太郎少佐は、連合艦隊司令部が巡洋艦大淀に移った時の大淀通信長 兼 連合艦隊司令部参謀)

矢嶋(島)少佐の次は、森田久一大尉、坪井泰一中尉、鈴木秀晴中尉、井上正尚少尉と続き、兵曹長 1 名、兵長 1 名、上等兵 2 名、平野保一等兵(当時 21 歳)。ここまでが軍人です。

その後は、事務員 11 人(女性)、通訳 2 名(男性)、給仕 1 名(女性)で、半分近くが女性です。通訳 2 名と事務員 1 名は「ハワイ二世 K 班」と書かれており、また事務員のうち 1 名は「人事局」、もう 1 名は「経理局」と書かれています。出向してきたのでしょうか。

そして平野保さんの字で「通訳の二人が敵国のアメリカ生まれのためか冷たい目で見られていました」「私は鷲塚兵長に女性事務員の前で殴られた」「天皇の録音放送直後に二世たちは鷲塚兵長を殴り倒してやるところまでいきました」「高官は逃げるようにして早く帰り、一等兵の私は解隊するまでこき使われました(昭和 20 年 9 月 30 日退隊)」と書かれています。敗戦直後の一種異様な雰囲気が伝わってきます。

《付記・2》日吉の軍令部第 3 部は「7 分室」

海軍は霞が関の本省以外の移転先を「分室」と呼んでいました。今回、『戦史叢書』付録の「大本営海軍部事務分担一覧表(昭和 19 年 8 月 2 日)」を調べていて、日吉の軍令部第 3 部が「7 分室」だったことがわかりました。たとえば実松讓大佐の電話番号が「電話七分室 10」と書かれています。部長の大野竹二少将は「電話 3065」と書かれていて本省ですが、第 5 課～8 課の課長、課員の電話はすべて「7 分室〇〇」です。軍令部総長副官部付の文官(「編修」という役職名)7 人のうち 6 人も第 3 部勤務で電話番号が「7 分室〇〇」でした。

私は設備アレコレ【16】(会報第 125 号 2016.2.10.)で、「第 7 分室」は日吉の海軍水路部(工学部校舎に移転していた)のことです、と書きました。その根拠は記事に書いてある通りです。しかし今回わかったことからすると、「第 7 分室」という場合には第一校舎の軍令部第 3 部もふくまれていたことになります。また人事局、経理局も第 7 分室でした(会報第 87 号、網野幸太郎氏投稿)。他方、日吉の連合艦隊司令部は「第 11 分室」で、航空本部地下壕は「第 13 分室」(生協ニュース第 68 号)、大倉山の海軍気象部は「第 5 分室」でした。

報告

桜花のレプリカ

運営委員 佐藤宗達

茨城県鹿嶋市の観光ガイドマップを見ていましたら「桜花公園」があり、桜花のレプリカがあるというので出かけました。東京駅から鹿島神宮行きのバスに乗り終点の手前：住金正門前で降りてすぐです。今は日本製鉄鹿島製鉄所になっていますが、1944 年当時は神之池海軍航空隊基地でした。その後 721 航空隊と改称され神雷部隊として桜花の訓練基地となりました。



掩体壕に置かれた桜花のレプリカ

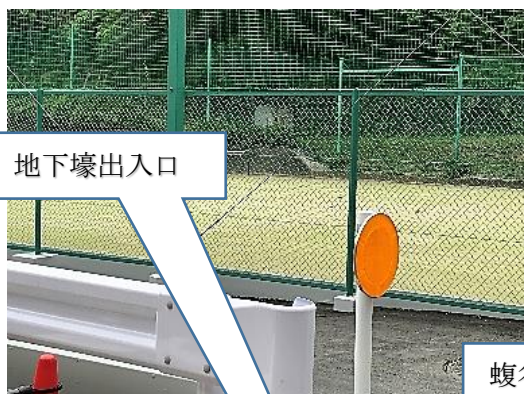
基地には桜花の練習機、吊り下げて攻撃地域まで運ぶ母機の一式陸上攻撃機、護衛の零戦などが配備され、訓練は練習機に爆弾と同重量の水を載せ母機離脱後空中に放水しながら滑空し着地用のソリで草の上を滑走するという危険なものでした。

基地周辺には掩体壕は十数箇所ありましたが今は 1 箇所だけが残り内に桜花のレプリカが置いてあります。柵越しに覗きますと意外と大きいなという感じがしました。全長 6.07M 全巾 5M、総重量 2140KG です。一見の価値あります。(記事は同公園内の案内板を参照しました)



蝮谷奥に完成した新しい道路

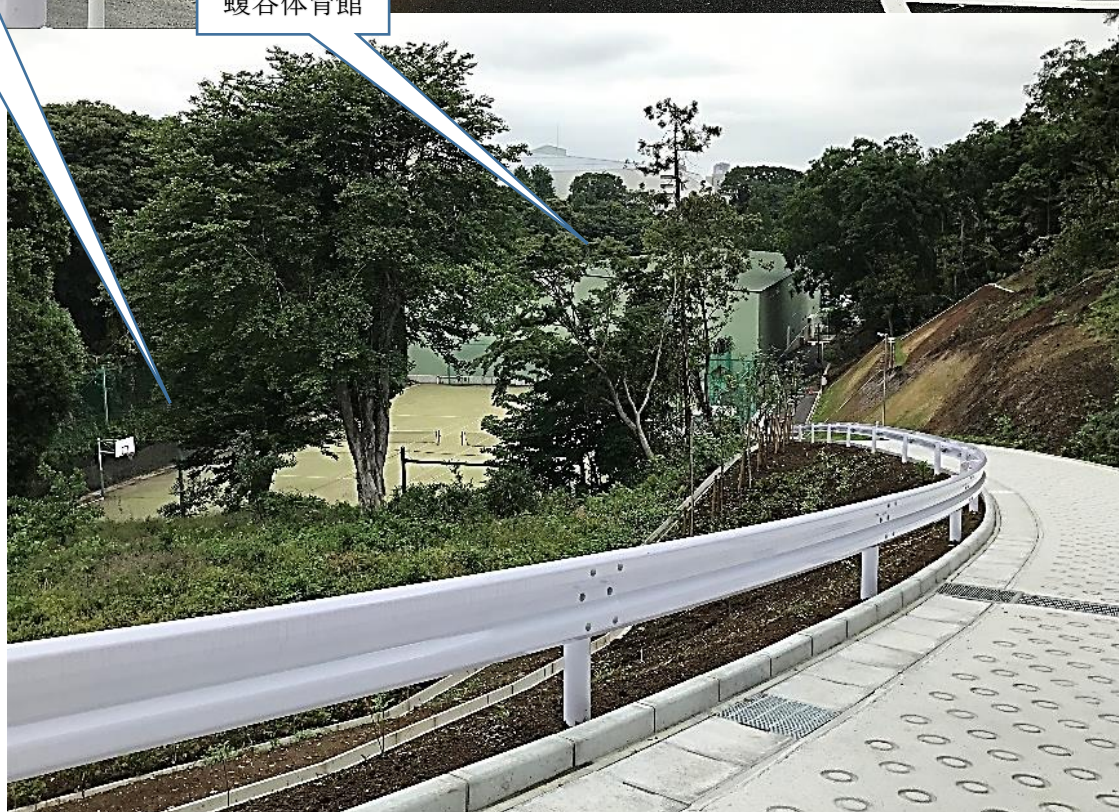
慶應日吉キャンパスは、「2020 東京五輪」開催時に英国チームのキャンプ地になります。



地下壕出入口



蝮谷体育館



活動の記録 2020年1月～5月

- 1/21(月) 地下壕見学会 日吉南小学校6年生 159名
 1/23(木) 会報141号発送(来往舎205号室)
 1/25(土) 定例見学会 31名
 1/29(水) 地下壕見学会 藤沢市立高倉中学校1年生 67名
 2/5(水) 定例見学会 13名
 2/7(金) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 2/22(土) 定例見学会 54名
 2/25(月) 地下壕見学会 大綱中学校2年生 112名
 2/26(火) 同 117名 ○全員マスク着用。地下壕での『密』を避けて
 2/27(水) 同 75名 案内を実施

★3月から6月まで、新型コロナウイルスの影響で運営委員会・定期総会・地下壕見学会・ガイド学習会・ガイド養成講座・バスツアー・平和のための戦争展戦争展 in よこはま等、会の活動を休止しています。

★地下壕見学会について

現在、慶應義塾から地下壕入坑許可は出ていません。

7月迄、定例見学会はお休みとします。8月以降は未定です。

今年、3月10日(火)、2年半にわたる建替え工事を経て、新日吉記念館(地上4階、地下2階建て、高さ25.8m)が竣工となりました。(撮影:5月下旬)



★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会